

論 文

市場価値論考

—大量支配的規定か加重平均的規定か—

東 井 正 美

I. 問題の所在

マルクスの市場価値論は、『資本論』第3巻第10章「競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」¹⁾において展開されている。この市場価値論に関して論議的となっているのは、以下の諸点である。まず第1に、市場価値論は『資本論』体系のうちでどのように位置づけられているのであろうか。第2に、市場価値の諸規定に関する叙述のなかで、「不明瞭な箇所」とか「曖昧な箇所」とか呼ばれているものがある。この箇所で、需要供給関係は市場価格の市場価値の背離を説明するだけだとしながらも、一見したところ需給関係が市場価値の大きさをきめるかのように叙述されているが、これをどのように解明したらよいのであろうか。第3に、市場価値に関する規定には、市場価値が諸個別的価値の算術加重平均として規定されるという「加重平均的規定」と、その部面で支配的大量を占める商品の「個別的価値」が市場価値を規制するという「大量支配的規定」とがみられるが、いずれが「一般的規定」なのであろうか。

本稿で、第三番目の問題をとりあげることにした。マルクスは、市場価値の概念を次のように規定している。すなわち、「市場価値は、一面では一つの部

1) 『資本論』の訳書は、『マルクス・エンゲルス全集』第25巻第2分冊を原則として使用するが、若干訳しかえた。そのさい、長谷部文雄訳本（青木書店版および河出書房新社版）と向坂逸郎訳本（岩波書店版）を参考にした。問題の第10章の引用か所は、パラグラフで示した。他のか所は、K III, S. 100 というように略記した。

面で生産される諸商品の平均価値と見られるべきであろうし、他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値と見られるべきであろう。」(第15パラグラフ)。これが問題の市場価値の概念規定である。この前半の規定では、加重平均の規定が述べられてあり、後半の規定では大量支配の規定が述べられてある。そこで、いずれの規定が「正当な規定」または「一般的規定」かということが問題となる。

大内力氏は、「後半の部分こそ市場価値の正当な規定だというべきであろう。」²⁾とされている。その論拠は、暫らくおくことにしよう。城座和夫氏は、「前の規定(平均規定)を厳密な規定とし、後半の規定(大量規定)を近似的な・便宜的な規定としている」³⁾とされ、「平均規定はじつは市場価値の特殊規定にしかなりえない性格のもの」であり、「この大量規定こそ市場価値の一般的規定をえるための出発点である。」⁴⁾と述べている。

高木彰氏も次のように言われている。すなわち、「マルクスは、ここでは、この二様の規定をどのような関係におけるものとして把握するかということが問題であるが、結論的に言えば、理念的に設定された平均価値の現実的根拠を与えるものが支配的・大量の規定である。しかし、市場価値が『再生産の基準』としての意味をもつものとすれば、それは現実的に規定されるものでなければならぬのであり、それが支配的・大量における個別的価値であるということである。諸資本間の競争は、種々の生産諸条件の相違を平均化していく傾向をもつものであるが、そのような生産諸条件の均等化が支配的であるという諸資本の運動を根拠として、現実的には支配的・大量における商品の個別的価値によって市場価値が規定されるものとしてかの二様の規定が論じられているのである。マルクスは、加重平均規定の現実的根拠を示すものとして、支配的・大量規

2) 大内力『地代と土地所有』(東京大学出版会、1958年)21ページ。

3) 城座和夫『労働価値論の基本問題』(ミネルヴァ書房、1971年)247ページ。

4) 同書、255ページ。

定を問題にしたのである。』⁵⁾

高木氏の所説は、きわめて示唆的である。高木氏が、平均価値の規定を「全く理念的に与えられたもの」として把握されていることは、そのとおりだと思う。「現実的には支配的大量における商品の個別的価値によって市場価値が規定される」と言われることも、まったくそのとおりだと思う。しかし、マルクスは平均価値——平均価格——どおりでの「販売・交換」を「合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である」として、大量支配の規定による市場価値が、この平均価値に等しいか、ほぼ等しいかということを「厳密に言えば」での叙述で検証しているのである。そして、支配的大量規定の「現実的根拠」を示すものとしては、いわゆる「不明瞭な箇所」での「普通の」需給関係と「異常な」需給関係であると、私は考える。これらの点は以下の行論であきらかにしてゆきたい。

これに反して、松石勝彦氏は、マルクスの市場価値論にあるのは、「加重平均のみである。」と述べられている。「一見大量支配的市場価値規定が与えられているようにみえるが、しかしマルクスは厳密に加重平均的市場価値規定をどの場合にも首尾一貫して与えており、第10章の市場価値論に加重平均と大量支配の二つの異なる規定があるわけではなく、あるのはただ前者のみである。一般的には、統計的代表値として加重平均値と最頻値＝大量支配値(それに中位数)が別箇にありうるとしても、それはわれわれの議論と何の関係もない。」⁶⁾ もっとも、松石氏は、限界原理を認められる。すなわち、「これに反して需要が非常に強くて、最悪の条件下で生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないならば、このような商品が市場価値を規定し、限界原理は成立しうる。……つまり、劣等個別的価値による市場価値規定の特殊条件は『需要が非常に強くて……収縮しない』こと、つまり需要量一定、市場空間＝有

5) 高木彰『市場価値論の研究——市場価格論序説——』、岡山大学経済学研究叢書第1冊（岡山大学経済学部、1982年）104～5ページ。

6) 松石勝彦『資本論研究』（三嶺書房、1983年）192～3ページ。

効需要額の増大である。もちろん、『需要が普通の需要を越える場合か、または供給が普通の供給よりも減る場合』のいずれでもよい。優等限界原理の場合も同じである。／以上みたように『不明瞭な箇所』を含むと考えられていた問題の文言は、先行文節で明らかにされた市場価値の一般的規定における『異常な組合わせ』の場合の特殊な条件つまり有効需要＝『支払能力ある欲望』(KⅢ190, 全集版202頁)の弾力性、弾力的増減を特別に明らかにしたものである。』⁷⁾と。

ここで松石氏が「劣等限界原理」と「優等限界原理」とを「一般的規定」に包摂されておられるが、しかしこの両規定は、やはり、大量支配的規定の現実的根拠を示すものとして理解されるべきであろう。

そういった考え方の外に上(優位)、中(中位)、下(劣位)の生産諸条件の「組合せ」、すなわち「中位的大量、上・下均衡」の場合における中位的規定＝平均規定を一般的規定とし、「下位相対的大量、上・下不均衡」と「下位相対的大量」との二つの場合における大量支配的規定を「特殊規定」と見なす考え方もある。

本間要一郎氏も、「マルクスは、加重平均的でない、大量平均的な規定をも、同時に与えているのであって、この原理的に相異なる二つの規定の関連をどう理解すべきかという問題が、市場価値規定をめぐる論争における一つの大きな争点となっていることは、周知のところであろう」⁸⁾と述べ、大量支配的規定次のように批判されている。「この大量を占める商品群の個別的価値に市場価値は一致する、と主張する……単純な『支配的大量』説は、たとえば上・中・下位の三つのグループのいずれもが市場の大半を占めることができないような『組合せ』のばあいには、市場価値はといったどのグループの個別的価値で決まるかという、ただちに生ずる疑問に直面しただけで窮地に立つことになり、

7) 同書、198～9ページ。

8) 本間要一郎『競争と独占』(新評論、1976年)66ページ。

また、支配的大量による規定では、中位が大量で、上・下均衡という特殊なばあい（このばあいにのみ、加重平均原理による規定と同じ結果になる）を除いて、個別的価値の総計と市場価値総額は一致せず、この差額を、労働価値論に基づいてどう説明するかという、一層困難な問題に逢着することになる。そこで、支配的大量規定を、加重平均規定と背馳しない形で理論的に生かそうとするばあいには、それは『げんみつな意味の平均的市場価値の自己疎外』（松田弘三「独占段階における生産価格と市場価値」『経済経営論集』第64号、1972年、4頁から）であるとか、加重平均による『抽象的規定をより具体的、感覚的にとらえ直した』（松石勝彦『独占資本主義の価格理論』；新評論、1972年、96頁）ものであるとか、という形で、『げんみつな意味の平均的市場価値』が『近似的に』自らを表現する形態だとみなすことになるのである（城座和夫氏も、マルクスは『前の規定（平均規定）を厳密な規定、とし、後の規定（大量規定）を近似的な便宜的な規定としている（『労働価値論の基本問題』1971年、247頁）。……。）しかし、加重平均規定と支配的大量規定とは、このように『厳密な規定』と『近似的な規定』という関係では片づけられない、原理的に相異なる考え方を示すもののように思われる。』⁹⁾

本稿では、加重平均規定と大量支配的規定との「原理的に相異なる二つの規定の関連」をどのように理解すればよいのか、という問題を考察する。

II. 市場価値の概念と市場価値の諸規定

1. 市場価値の概念

マルクスは、『剰余価値学説史』¹⁰⁾——以下、『学説史』と略記——で、ある生

9) 同書、76ページ。

10) Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, Zweiter Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1967. マルクス＝エンゲルス全集第26巻第2分冊（大月書店、1970年）。MEGA（Manuskript 1861～1863）。マルクス「資本論草稿集」⑥経済学批判（1861～1863年草稿）第3分冊（大月書店、1981年）。

「剰余学説史」の問題の部分の訳書としては、大島清・時永淑訳、国民文庫版、

産部面、「たとえば綿布製造業における個々の資本家がそのもとの生産を行なうところの特殊な諸条件は、必然的に三つの部類に分かれる。」と述べ、三つの部類について以下のように述べている。

「一つの部類は、中位の条件のもとで生産する。すなわち、彼らがそのもとの生産するところの個別的生産条件は、その部面の一般的な生産条件と一致する。平均状態が彼らの現実の状態なのである。彼らの労働の生産性は、平均的な高さをもっている。彼らの商品の個別的価値は、この生産部面の商品の一般的な価値と一致する。彼らたとえば綿布1エレを2シリングで——平均価値で——売るとすれば、彼らはそれを、自分たちの生産した1エレが現物のままで表わしている価値どおりに売るのである。もう一つの部類は、平均的条件よりも良い条件のもとで生産する。彼らの商品の個別的価値は、同じ商品の一般的な価値よりも低い。彼らが同じ商品をこの一般的な価値で売るとすれば、彼らはそれを、その個別的価値よりも高く売るわけである。最後に、第三の部類は、平均的生産条件よりもわるい条件のもとで生産する。」(傍点は原文のイタリック。543ページ)

そして、マルクスは、これらの部類で生産される商品の相異なる個別的価値の市場での「一般的な価値」または「共通の価値」を市場価値だと述べている。マルクスは言う。

「この部類の諸生産物をもつ一般的な価値は、これと各個の商品の個別的価値との比がどうであろうとも、すべての商品について同じである。この共通な価値こそ、これらの商品の市場価値であり、それらの商品が市場に出てくるとき

『剰余価値学説史』(4)(5)、大月書店、1965年、1966年。岡崎次郎・時永淑訳、国民文庫版『剰余価値学説史』(4)(5)、大月書店、1970年、1971年。

ここでの訳書としては、『資本論草稿集』を使用するが、その他の訳書も参考にした。引用箇所を手稿ノートページ数で示す。これだけがいずれの訳書にも共通しているからである。原文のページ数は、それぞれ訳書の本文上欄に丸括弧内のアラビア数字で示されているので、それをみていただくことにして、ここでは示していない。

の価値である。この市場価値の貨幣での表現が市場価格であって、……現実の市場価格は、……この市場価値に一致することは偶然にすぎない。しかし、ある一定期間では諸変動は平均されるのであって、現実の市場価格の平均が市場価値を表わす市場価格である、ということが出来る。……いずれにしても現実の市場価格は市場価値と共通な質的規定をもつ。その規定というのは、市場にある同じ生産部面のすべての商品は(もちろん質を同じものと前提すれば)、同じ価格をもつということ、すなわち、事実上この部面の諸商品の一般的価値を表現するということである。」(傍点は原文のイタリック。543ページ)

同じ生産部面で相異なる生産諸条件のもとで生産される同種の諸商品は、相異なる個別的価値をもつ。しかし、これらの商品が同じ市場に出るときには、相異なる個別的価値をもつとはいえ、同じ価値、すなわち一般的価値をもたなければならない。この「共通な価値」が市場価値である。このようなものとして市場価値の概念が述べられてある。

それでは、同種の諸商品の相異なる個別的価値のいずれが、同一市場において、「共通な価値」すなわち市場価値となりうるのか。これが市場価値の諸規定の課題なのである。この点については、後で考察することにしよう。

マルクスは、先の引用文の中で、「現実の市場価格」は、「この市場価値に一致することは偶然にすぎない」が、「現実の市場価格の平均が市場価値を表わす市場価格である」と述べている。市場価値と市場価格との一致は、需要と供給の一致を前提とする。需要と供給との不一致のばあいには、市場価格は市場価値から背離する。問題の第10章で、マルクスは言う。

「与えられたどの場合にも需要と供給とはけっして一致しないとしても、それらの不一致は次々に続いて起きるのだから——そして一方へのかたよりの結果が反対の方向への別のかたよりを呼び起こすのだから——、大なり小なりの一期間の全体を見れば、供給と需要とは絶えず一致するのではあるが。こうして、市場価値からかたよる市場価格も、それらの平均数から見れば、平均されて市場価値に一致する。というのは、市場価値からの諸偏差はプラスとマイナ

スとして相殺されるからである。」(第44パラグラフ)

マルクスは、市場価値の諸規定を論じるさいには、需要と供給との一致を前提とし、市場価格に一致している市場価値を取り扱っているのである。このことは、マルクスが、大量支配的規定を与えたあとでわざわざことわっている次の一文から明瞭に看取されるであろう。

「市場が供給過剰の場合には、いつでも、最良の条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが、このような場合はここでは問題にしない。われわれがここで取り扱うのは、市場価値の別ものであるかぎりでの市場価格ではなく、市場価値そのもののいろいろな規制なのである。」(第30パラグラフ)

この指摘は極めて重要なので敷衍的に解説しておこう。市場が供給過剰なばあいには、最良の条件のもとで生産される商品が、その多寡にかかわらず、市場価格を規制する。この市場価格は市場価値から背離している。最良の条件のもとで生産される大量商品の個別的価値が市場価値を規制するのは、需要と供給とが一致していなければならない。「市場価値が何であろうとも、これを取りだしてみるためには需要と供給とが均衡していなければならないということは、平凡な経済学者でも認めざるをえないのである。」(第48パラグラフ)したがって、需給不一致のもとで($S > D$)、最良の条件のもとで生産されるその商品の個別的価値が、その商品量の多寡にかかわらず、規制するのは、市場価値ではなく市場価格である。それゆえに、市場価値の諸規定で取り扱うのは、市場価値と一致した市場価格であって、「市場価値と別ものであるかぎりでの市場価格」ではない。マルクスが取り扱うのは、市場価格と一致した市場価値の諸規定なのである。

要するにマルクスが市場価値規定に関して論述している市場価値は、需給一致のもとで市場価格と一致したものである。つまり、市場価値の諸規定で取り扱われる市場価値は、市場価格と一致しているものであって、市場価値イコール市場価格なのである。もちろん、市場価値は「価値次元」のものであり、市

場価格は「価格次元」のものではある。

市場価値の諸規定で取り扱われる市場価値が市場価格と一致しているということは、言うまでもなく、市場価値で表示される労働時間と、市場価格——貨幣額——が表現している労働時間とが合致しているということである。共に、同一の一般的価値を表示する市場価値と市場価格とが背中合わせに一体となっているのである。このことは、マルクスが「市場価値がちょうどこの貨幣額で表わされて他のどの貨幣額でも表わされないかということについては云々」（傍点は東井）（第44パラグラフ）と述べていることからして明らかであろう。

市場価値の諸規定に関して取扱われている市場価値は、需給一致のもとで、市場価格と一致していなければならない。この点に焦点を合わせてみれば、宇野弘蔵氏が、市場価値を「市場を媒介にして決定される社会的価値」¹¹⁾として把握されたのは正しいと言わざるをえない。需要と供給とが不一致になれば、市場価格は市場価値から離れて、市場価値を中心に変動するのである。

この市場価値を成立させるのは、競争である。マルクスは、問題の第10章で、「競争が、さしあたりまずある一つの部面で、なしとげること、諸商品の相異なる個別的価値から同じ市場価値と市場価格とを成立させることである。」（第20パラグラフ）と述べている。『学説史』で次のように述べている。「ここで競争が、いろいろに違う個別的価値を、同一の等しい、無差別な市場価値に均等化するのは、競争が、個別的な諸利潤つまり個々の資本家たちの諸利潤内の差異、および、それらの利潤のこの部面の平均利潤率からの偏差を、そのままにして置くことによってなのである。しかも、競争がこれらのことを生み出すのは、……個別的に不等な大きさの労働時間量を表わす諸商品について、同じ市場価値を成立させることによってである。」（傍点は原文のイタリック。544ページ）

2. 大量支配的規定と加重平均規定

マルクスは、市場価値に関する諸規定について、『学説史』では、次のよう

11) 宇野弘蔵『経済原論』下巻（岩波書店、1952年）90ページ。

に述べている。

「どの部類が平均的価値を確定するのに決定的であったかということは、主としてこれらの部類の数的関係または比率的数量関係によって定まるであろう。もし中位の部類が数のうえではるかに優勢であれば、これが平均的価値を決定するであろう。この部類が数のうえで劣勢であれば、そして平均的条件よりもわるい条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、これがその部面の生産物の一般的価値を決定する。といっても、その場合に、この部類内でさらに最も不利な立場に置かれている個々の資本こそがこの決定をするのだと言おうというのでは、けっしてない。またそうしたことはとてもありそうにもないことである。」(傍点は原文のイタリック。543ページ)

上の引用文中での「数的関係または比率的数量関係」には、ドイツ社会主義統一中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編集の『カール・マルクス＝フリードリッヒ・エンゲルス全集、第26巻、第2分冊』では本全集ドイツ語版編集部の次のような注解がある。すなわち、「マルクスがここで言っているのは、これらの群のそれぞれによって市場に出される生産物量のことである。」¹²⁾

その前半では、平均的価値の確定には「これらの部類の数的関係または比率的数量関係」が決定的であることが述べられ、その後半では大量支配的規定が述べられてある。再びとり出してみれば、「もし中位の部類が数のうえで劣勢であれば、そして平均的条件よりもわるい条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、この部面の生産物の一般的価値を決定する。」このように大量的支配規定が述べられているのである。

マルクスは、問題の第10章では、先ず、市場価値に関する市場価値に関する具体的な規定として大量支配的規定を与えている。その後で、理想的な規定と

12) 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻第2分冊（大月書店、1970年）注解の10ページ。

しての加重平均的規定を与えている。以下の通りである。

「一つの部面全体の生産物として市場にある商品量」の「大量がほぼ同一の標準的な社会的条件のもとで生産されていて、この価値は同時に、この大量をなす個々の商品の個別的価値だと仮定しよう。いまもし、比較的小さい一部分はこの条件よりもわるい条件で、他の一部分はそれよりもよい条件で生産され、したがって、一方の部分の個別的価値はこの商品の大きな部分の中位的価値よりも大きく、他方の一部分の個別的価値はこの中位的価値よりも小さいが、しかしこの両極は平均されて、両極に属する商品の平均価値は中位的大量に属する商品の価値に等しいとすれば、市場価値は、中位的条件のもとで生産される商品の価値によって規定される。／これに反し、問題の商品の市場に出される数量は同一不変であるが、劣悪な条件のもとで生産される商品の価値が優良な条件のもとで生産される商品の価値と相殺されないために、劣悪な条件のもとで生産される商品量部分が中位の商品量にくらべても相対的にかかなりの大きさを占めていると仮定しよう。そのばあいには、劣悪な条件のもとで生産される商品大量が、市場価値または社会的価値を規制する。最後に、中位よりも優良な条件のもとで生産される商品分量が、中位よりも劣悪な条件のもとで生産される商品分量よりもずっと多く、中位的事情のもとで生産される商品分量にくらべてもかなりの大きさを占めていると仮定しよう。このばあいには、最良の条件のもとで生産される部分が市場価値を規制する。」（第28パラグラフから第30パラグラフ）

すぐ引きつづき、「本当に厳密に言えば(といっても、もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現われるだけであるが)」と、わざわざ前置きして、以下の説明をはじめめる。

「第一の場合には、中位の価値によって規制される全商品量の市場価値は、それぞれの個別的価値の総計に等しい。といっても、両極で生産される商品にとってはこの価値はその商品に押しつけられた平均価値として現われるのであるが。その場合、最悪の極で生産する人々は自分の商品を個別的価値よりも安

く売らなければならないが、最良の極で生産する人々は個別的価値よりも高く売るのである。」（第31パラグラフ）

「第二の場合には、両方の極で生産される個別的価値量が相殺されないで、劣悪な条件のもとで生産されるものが決定する。厳密に言えば、各個の商品の、または総商品量の各可除部分の、平均価格または市場価値は、いまでは相異なる諸条件のもとで生産される商品の価値の加算に出てくる商品量の総価値と、この総価値から個々の商品に割り当たる可除部分とによって規定されているであろう。このようにして得られる市場価値は、有利な極に属する商品の個別的価値よりも高いだけでなく、中位の層に属する商品の個別的価値に比べてもそれより高いであろう。しかし、それは、不利な極で生産される商品の個別的価値に比べれば、やはりそれよりも低いであろう。」（第32パラグラフ）

「最後に、第三の場合のように、有利な極で生産される商品量が、単に他方の極のものとは比べただけではなく中位の条件のものとは比べても、より大きい範囲を占めているならば、市場価値は中位の価値よりも低くなる。両極と中位の価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合には中位の価値よりも低い。そして、それは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くもなれば遠くもなる。」（第33パラグラフ）

これらの市場価値に関する諸規定をめぐって問題となっていることは、以下の諸点である。先ず第1に、大量支配的規定と、「厳密に言えば」での加重平均規定との「内的関連」についてどのように考えればよいのか。第2に、「第一の場合」には、その部面で支配的大量をなす商品量の個別的価値と、平均価値とは一致するが、「第二の場合」と「第三の場合」とのいずれにおいても両者は一致していない、——この点をどのように理解すればよいのであろう。第3に、大量支配的規定と加重平均規定のいずれが「一般的規定」なのか。これらの問題について、節を改めて考察しよう。

Ⅲ. 加重平均的規定か大量支配的規定か

この問題への接近として、まず市場価値の規定に関して、加重平均規定を「一般的規定」とする説を検討してみよう。

加重平均規定を一般的規定とする説。松石勝彦氏は次のように言われている。すなわち、「マルクスの市場価値の一般的規定の根本、核心は、異なる諸個別的価値の均等化つまり加重平均にある。」¹³⁾ 市場価値に関する規定の「根本、核心」が「加重平均」だと言われる点には異論がない。なぜならば、加重平均規定にせよ、大量支配的規定にせよ、市場価値に関する規定の「根本、核心」が「加重平均」であることは言うまでもないからである。この点は、次のマルクスの言葉を引用するまでもなく、あきらかなことである。

「一定の物品を生産するために費やされる社会的労働の範囲が、充たされるべき社会的欲望の範囲に適合しており、したがって生産される商品分量が、不変的需要のもとでの再生産の普通の基準(der gewöhnliche Maßstab der Reproduktion)に適合しているならば、商品は市場価値どおりに売られる。価値どおりでの諸商品の交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然法則であり、これから出発して背離を説明すべきであって、その逆に、背離から出発して法則そのを説明すべきではない。」(第37パラグラフ)

引用文中で、「再生産の普通の基準」とは、平均価値＝市場価値を調節した基準のことである。マルクスは、同種の諸商品が平均価値としての市場価値どおりに売られるばあいの需要と供給との一致を「普通の需要」と「普通の供給(量)」との対応関係としてとらえているものと、考える。したがって、「価値どおりでの諸商品の交換または販売」を市場価値＝平均価値どおりの「交換または販売」と読むことができよう。マルクスが加重平均としての市場価値どおりでの諸商品の交換または販売は、「合理的なものであり、諸商品の均衡の自

13) 松石勝彦『資本論研究』(三嶺書房, 1983年) 186ページ。

然法則である」と述べていることからして、松石勝彦氏の言われるように、「マルクスの市場価値の一般的規定の根本、核心は、相異なる諸個別的価値の均等化つまり加重平均にある。」この点にはだれしも異論をさしはさむものではない。松石氏は、至極、当たり前のことを言っておられるにすぎないのである。

さらに、問題の市場価値の概念に言及して次のように「前半」と「後半」とは「無矛盾」だと説かれている。

「ここでは、たしかに、市場価値は一面では『平均価値』であり、他面では『大量をなす商品の個別的価値』とあり、一見加重平均規定と大量支配的規定との『くいちがった二つの考え方がすでに含まれている』（大内力『地代と土地所有』1958年、5ページ）ようにみえる。……ここでは明らかに『大量』は『その部面の平均的条件の下で生産されてその部面の生産物の大量をなす』と限定されており、だからこの場合には、加重平均(weighted average)の「重」の大量が『平均的条件』に属すると規定され、それゆえ加重平均＝『平均価値』と『大量をなす商品の個別的価値』とは明らかに無矛盾であり、全く同じである。/『平均価値』＝『大量をなす商品の個別的価値』＝『中位的価値』、すなわち『平均』＝『^{モード}中位』＝『大量』(最頻値)であり、かかる三面等価は正規分布のときのみ成立する。このように、マルクスは市場価値の最初の一般的規定にさいして、明らかに正常な場合、正規分布を前提して、『市場価値は一面では……諸商品の平均価値、……他面ではその部面の平均的条件のもとで生産され……大量をなす商品の個別的価値』という市場価値規定を与えているのである。だから、この『一面』と『他面』とは一見矛盾するようだが、何ら矛盾しない。』¹⁴⁾

たしかに、「前半」と「後半」とは「無矛盾」として読むことができよう。だからといって、従来からの問題が片付くものではなからう。従来からの問題とは、加重平均的規定と大量支配的規定とは「形成原理」を異にしているとい

14) 同書、187ページ。

うことである¹⁵⁾。したがって、「中位的大量、上・下均衡」という「第一の場合」においてのみ、両規定の結果は矛盾しないのである。「第一の場合」でも、上・下の両極が相殺されないとすれば、平均価値と、その部面で「大量をなす商品の個別的価値」とは一致しないのである¹⁶⁾。「第二の場合」と「第三の場合」のいずれにおいても、平均価値と「大量をなす商品の個別的価値」とは一致しないのである。これは、「前半」での加重平均的規定と「後半」での大量支配的規定とは「形成原理」を異にしていることに基づくものであろう¹⁷⁾。

それでは大量支配的規定と加重平均規定をどのようなものとして把握されるべきであろうか。マルクスは、市場価値の確定をまず大量支配的規定からはじ

15) 加重平均的規定と大量支配的規定とが「形成原理」を異にしているということについてデ・イ・ローゼンベルは次のように指摘している。

「もし市場価値を『ある部面で生産される商品の平均価値』とみなすと、それは、個別的価値の総和を商品総量に分割することによって形成される。だかもし市場価値を『その部面の平均的条件のもとで生産される商品の個別的価値』とみなすと、その形成原理はもはやちがってくる。平均的条件のもとで支出される労働が各商品の価値を、すなわちまた、別の条件のもとで生産された商品の価値をも、規定するのである」(副島一種典・宇高基輔訳『資本論注解』第4分冊、青木書店、1962年、123～4ページ)。

16) この点に関して、大内力氏は次のように指摘されている。

「そこでたとえばひとつの生産部門で、10円の個別的価値をもった商品が30個と、8円の個別的価値をもった商品が60個と、5円の個別的価値をもった商品が10個というふうに市場に供給されるとすれば、この100個の商品の市場価値は総計830円、1個当たり8.3円ということになる。だが、さきの規定の後半にしたがうならば、このばあい、『平均的諸条件のもとで生産され、その部面の生産数の大量をなす諸商品の個別的価値』は、明らかに8円であろうから、それが市場価値となるといわなければならないのである」(大内力、前掲書、5～6ページ)。

17) この点に関して、鈴木鴻一郎氏も次のように言われている。「ここでの問題は、上の章句における「平均価値の『平均』と『平均的諸条件』の『平均』の意味がそれぞれ異なるものではないかということである。すなわち前者の場合は算術平均の意味に用いられていると考えられるに反し、後者の場合には算術平均の意味の外になお支配的 averages の意味をも容れる余地を残しているのではないかと考えられるのである。そうならばマルクスは同じ『市場価値』という概念を二つの異った意味に用いていることにならざるを得ない」鈴木鴻一郎『地代論論争』、勁草書房、1952年、221ページ。

めている。マルクスは、「第一の場合」でも、「第二の場合」でも「第三の場合」でも、その部面で支配的・大量をなす商品量の個別的価値を市場価値として確定しているのである。なぜその部面で支配的・大量商品が市場価値となりうるのか。これが問題である。

同種の諸商品の相異なる個別的価値のいずれが、同一市場において、「共通な価値」すなわち市場価値となりうるのか。これが市場価値規定の課題である。このようなものとしてとらえる見解に以下のようなものがある。

城座和夫氏は以下のように言われている。「各商品生産者がそれぞれ商品の生産に要する労働時間(個別労働時間)が相異なるとき、どの水準の労働時間が価値の大きさを決定するところの社会的に必要な労働時間となるかについて」の「問題の検討は市場価値で行なわれる。同種商品の生産に個々の商品生産者の必要とする労働量(個別労働量)労働時間(個別労働時間)が相異なり、したがって個別価値が相異なるとき、市場価値はどの水準の個別価値に等しくなるであろうか」という問題の考察がこれである。これが市場価値論の価値次元の側面である。」¹⁸⁾ 大内力氏も次のように述べられている。すなわち、「市場価値がどれが規定するかは、やはりこうした技術がどのていど普及し、どこで社会的需要におうじうる再生産を確保しうるかによってきまることである。」¹⁹⁾ 桜井毅氏は、「市場価値論は、マルクスにあっても、社会的価値の規定の具体的なあり方を説明しているものであって、それは個別的価値を社会的価値として実現してゆく資本主義的処理方法をあきらかにしているものである。」²⁰⁾

三氏の所説は、それぞれニュアンスの相違があるとはいえ、市場価値の諸規定の課題を、同種の諸商品の相異なる個別的価値のいずれが同一市場において競争を通して市場価値または社会的価値となりうるかという問題としてとらえているものであるであろう。まさしくその通りであろう。私は、支配的・大量商

18) 城座和夫、前掲書、229ページ。

19) 大内力、前掲書、21ページ。

20) 桜井毅『生産価格の理論』（東京大学出版会、1968年）272ページ。

品の個別的価値が市場価値または社会的価値として実現してゆく「具体的なあり方」を説明しているのが、市場価値論の課題である、と考える。

その部面で支配的な大量商品の個別的価値が市場価値となりうるのは、次の理由によるものであろう。まず第一に、その部面で支配的な大量商品の個別的価値は、それが支配的大量なるがゆえに、平均価値にまったく等しくなるか、ほぼ等しく(近似的)なるということである。もっとも、「もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけであるが」(第31パラグラフ)。したがって、支配的大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、平均価値にまったく等しいかほぼ等しいのである。マルクスは、『学説史』で、「同じ生産部面のなかの競争の結果として生ずるものは、この部面の商品の価値を、その部面で平均的に必要とされる労働時間によって規定すること、つまり市場価値の成立である。」(傍点は原文のイタリック。545ページ)と述べているが、この「平均的」には「支配的」という意味も含まれているものと思われる。マルクスは、『学説史』の他のか所で、「その生産部面で支配的な価値、つまり市場価値は、云々」(傍点は原文のイタリック。578ページ)と述べていることからして、そのことは明らかであろう。第2に、支配的大量商品の個別的価値で規制される市場価値でその商品が販売されるならば、大量の商品がそれらの個別的価値どおりに販売されるということになるであろう。支配的大量商品の個別的価値が市場価値となりうるのは、上の根拠に尽きるものと思われる。これらは、同時に、大量支配的規定が「現実的な規定」であり、「具体的な規定」といわれる根拠を提示するものである。

これらの商品量が同一市場において市場価値どおりに売られるためには、市場価格がこれに一致することを必要とする。「諸商品の市場価格が市場価値と一致して、……それからかたよらないためには、いろいろな売り手が互いに加え合う圧迫が、社会的欲望の要求する商品量、すなわち社会が市場価値を支払うことのできる商品量を市場に出させるほど十分に大きいことを要する。」(第22パラグラフ)諸商品の市場価格が市場価値と一致するためには、「同じ種類の商

品の生産者たちの競争が必要である」(同パラグラフ)とともに、「現実の市場では買い手たちのあいだの競争によって媒介される。」(第34パラグラフ)マルクスは、市場価値の諸規定で取り扱う市場価値を市場価格と一致したものとしている。桜井毅氏は、次のように述べられている。「市場価値規定は価値規定の内容をたんに『商品大量』に『現実化』したというだけではすまされない問題をふくむ」ものであって、「すなわち、市場価値は市場価格の運動を媒介することなしには確定しえないということであり、それゆえに『市場』という語が付されているという事実である。」²¹⁾ 市場価値の運動は、買い手たちの競争によって「媒介される」。したがって、「単なる個別的価値がひとつの市場価値に統一されてゆく過程……が市場価格の変動をとおしておこなわれる²⁾²²⁾ 側面があることは否定できない。しかし、それがゆえに「市場」という語が付されているのではない。同種の諸商品の相異なる個別的価値の同じ市場における「共通な価値」であるがゆえに「市場」という語が付されているのである。市場価値の確定だけならば、生産諸条件の「組合せ」によってなされるはずだからである。

マルクスは言う、「同じときには、市場にある同じ種類の生産物は同じ価格をもつ、あるいは、ここではこの価格の偶然性は捨象できるのだから、同じ市場価値をもつ。したがって、この場合には、一部は資本家たちどうしの競争、一部は彼らと商品の買い手との競争、また商品の買い手どうしの競争が作用して、そのために、特殊な生産部面の各個の商品の価値は、この特殊な社会的生産部面の商品総量が必要とする社会的労働時間の総量によって規定されるのであって、個々の商品の個別的価値または個々の商品がその特殊な生産者および売り手に費やせた労働時間によって規定されない、ということになるのである。」(傍点は原文のイタリック。544ページ)

ここに、「商品総量が必要とする社会的労働時間の総量」のとらえ方が問題となるであろう。この商品総量の価値総額は、市場価値規定をとおして変容さ

21) 桜井毅，前掲書，254ページ。

22) 同書，255ページ。

れるものと考えざるをえない。大量商品の個別的価値が上位、中位、下位のいずれの生産諸条件で生産されるかにしたがって、この個別的価値は、中位的価値であることもあれば、それよりも高い価値であることも、低い価値であることもある。したがって、支配的大量商品の個別的価値の大きさ如何で、市場価値総額は大きくもなれば小さくもなる。同種の諸商品の相異なる個別的価値のいずれが同一市場において「共通な価値」すなわち市場価値になりうるのか。それはその部面で支配的な大量商品である。先ず第1に、その部面で支配的な大量商品の個別的価値は、それが支配的大量なるがゆえに、平均価値に等しいか、平均価値にほぼ等しくなるのである。マルクスが「もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけである」（第31パラグラフ）と述べているのは、この点をとらえたものであろう。規定される市場価値の総計が「商品総量が必要とする社会的労働時間の総量」に合致することもあれば、合致しないこともある。「中位的大量、上・下均衡」の「第一の場合」において、全商品量の総価値額と市場価値総額とは等しい。しかし、「下位相対的大量」の「第二の場合」と「上位相対的大量」の「第三の場合」とのいずれにおいても、両者は等しくない。この相違は、支配的大量商品の個別的価値が市場価値を規定することを通して生じるのである。しかしながら、この相違は、市場価値を規制する商品量はこの部面で支配的大量なるがゆえに、僅差であるであろう。角度を変えていえば、市場価値規定を通して、全商品量の総価値量を変容させるのは、この部面で支配的大量をなす商品量の個別的価値に規制された市場価値と言わざるをえないのである。現実の市場では、市場価値の規定を通して全商品量の総価値量は変容されてさまざまな価値量で現れざるをえないのである。より大きい個別的価値で規制される市場価値の総計は、個別価値の総計より大きいはずだし、小さい個別的価値で規制される市場価値の総計は、個別的価値の総計よりも小さいのである。しかしながら、全商品量の総価値額と市場価値の総額の相違といってもそれは僅差であるのである。これをあきらかにしたのが、「厳密で言えば」での叙述である。そこでは、支配的大量商品の個

別的価値に規定される市場価値と、平均価値との関係が明らかにされている。しかし、叙述の仕方は、加重平均的規定による市場価値を基軸にすえて、この市場価値と大量商品の個別的価値との関係をみるという方法で行われている。

では、なぜマルクスは、「厳密に言えば」での加重平均規定を与えたのであろうか。大量支配的規定による市場価値が「平均価値」と合致しているかどうかを検証することにあるのであろう。こういう検証が必要なのは、マルクスが、平均価値に合致した市場価値どおりでの交換または販売を、「合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である」と考え、「この法則から出発して背離を説明するべき」だと考えたからであろう。（第37パラグラフ）

「第一の場合には、中位の価値によって規制される全商品量の市場価値は、それぞれの個別的価値の総額に等しい。」「第二の場合」には、加重平均値としての市場価値は、「中位の層に属する商品の個別的価値に比べてもそれより高いであろう。しかし、それは、不利な極で生産される商品の個別的価値に比べれば、やはりそれよりも低いであろう。市場価値がどの程度までこれに近づくか、または結局これと一致するかは、まったく、不利な極で生産される商品量とその商品部面でどれだけの範囲を占めるかによって定まる。」（第32パラグラフ）

「第三の場合」には平均価値としての市場価値は、「この場合には中位の価値よりも低い。そして、それは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くなれば遠くもなる。」（第33パラグラフ）

マルクスが以上の叙述で明らかにしようとしたことは、次のことであると思われる。まず第1に、相異なる生産諸条件が「理想的な、すなわち現実には存在しない中位状態を志向している」（第2パラグラフ）という視点から、平均価値としての市場価値の中位的価値に対する遠近を明らかにしているものと思われる。第2に、平均価値としての市場価値の大量商品の個別価値に対する遠近を示しているものと思われる。

その部面で支配的少量を占める個別的価値によって規制される市場価値が平均価値に合致しているのかどうかというように叙述するのではなく、平均価値

としての市場価値が大量商品の個別的価値に合致しているかどうかというふう
に叙述しているのである。このように市場価値イコール平均価値を基軸にして
それからの大量商品の個別的価値のかたよりを叙述しているのは、マルクスが
平均価値としての市場価値どおりの「交換・販売」を「合理的なものであり、
諸商品の均衡の自然法則である」と考えていたからにはほかならないのであ
る。

しかしながら、市場価値に関するこのような加重平均規定は、やはり、理念
的な規定と言わざるをえないのである。以下、この点をさらに考察しよう。

マルクスが「厳密に言えば」での平均価値としての叙述に入る前に、大量支
配的規定を与えているのである。「第一の場合」での書き出しは、「中位の価値
によって規制される全商品量の市場価値は、云々」である。この「中位の価
値」とは、中位の条件のもとで生産されている大量商品の個別的価値の意であ
るのであろう。「第二の場合」の書き出しも、「両方の極で生産される個別的価
値量が相殺されないで、劣悪な条件のもとで生産されるものが決定する。」と
なっている。「第三の場合」の書き出しも次のようになっている。「有利な極で
生産される商品量が、単に他方の極のものとは比べてだけではなく、中位の条件
のものとは比べても、より大きい範囲を占めているならば、市場価値は中位の価
値よりも低くなる。」(傍点は東井)ここに市場価値とあるのは、最良の条件のもと
で生産される支配的大量商品の個別的価値に規制される市場価値のことである
であろう。もしそうでなければ、次の文章がダブルことになり、まったく同じ
ことの繰り返しであり、不要なものといわざるをえない。換言すれば、上の市
場価値を平均価値としてのそれと理解すれば、その次にくる文章、すなわち
「両極と中位の価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合には
中位の価値よりも低い。」という文章がまのびしてまったく生きてこないの
である。だから、この文章の前に「厳密に言えば」という言葉を入れて読むべき
であろう。かように、「第三の場合」でも、大量支配的規定を与えてから、「厳
密に言えば」での平均価値としての市場価値を説いているものと思える。

要するに、マルクスは、わざわざ大量支配的規定の前置きを付けて、「厳密に言えば」での加重平均規定を説いているのである。これはなぜか。答は明白である。大量支配的規定が「現実的な」規定であり、加重平均規定は、「極めて「理念的な規定」または「理想的な規定」であるからである。「本当に厳密に言えば(といっても、もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけであるが)」という前書きでの、「本当に厳密に言えば」が加重平均規定にあたるものであり、括弧内が大量支配規定にあたるものと思われる。マルクスの叙述から、大量支配的規定を現実的な規定または具体的な規定と考えていたものと思われる。なぜならば、加重平均的規定による場合には、市場価値が平均価値として機械的にかつ抽象的に現れるだけであるからである。

同種の諸商品の平均価値は、大量支配的規定による市場価値の結果であってこれに先行するものではない。換言すれば、支配的大量商品の個別的価値によって規制される市場価値が平均価値に等しいかほぼ等しいかということは、競争による市場価値の規定の結果なのである。同種の諸商品の相異なる個別的価値が「一般的な価値」(市場価値)となるための競争において、抽象的な平均価値が参加しうる余地がないのである。およそ、現実の市場での市場価値の規定には加重平均的規定なるものは存在しえないのである²³⁾。もっとも、大量支配

23) この点に関して、大内力氏は次のように言われている。「平均価値によって市場価値が決定されるというその前半の規定は、われわれにはとうていいうけいれがたいものである。このような平均価値は、算術計算としてはいちおう成りたちうるかもしれない。しかし市場における競争をつうじて、なにゆえそのような平均価値が市場価値を規制するのかということは、まったくわからないし、このように算術的に計算された平均価値と、商品の再生産のために必要な労働量とが、どういう関係にあるのかもわからない」(大内、前掲書、22ページ。)

大内氏は、大量支配的規定こそが「正常な規定」だといわれる。私もそう思う。およそ、現実の市場では加重平均規定なるものはありえないからである。しかし、支配的大量商品の個別的価値によって規制される市場価値が平均価値にまったく同じかそれに近似的であるということが価値法則を理解するうえで重要な点であって、この点は無視されるべきではないであろう。平均価値としての市場価値どおりの「交換・販

的規定による市場価値—近似的なそれ—を平均価値に包摂してとらえることが必要である。すでに指摘しておいたように、平均価値としての市場価値どおりの交換・販売は、「合理的なものであり、諸商品の均衡の自然法則である」がゆえにである。大量支配的規定を加重平均的規定にとらえなおすことはできないが、大量支配的規定による市場価値——それが平均価値であれそれに近似的であれ——を平均価値の範疇に包摂させることはできよう。

ところで、大量支配的規定に関していえば、問題の生産部面での全商品量の市場価値総計が全商品量の個別的価値の総計に一致しているのは、「第一の場合」においてだけであって、「第二の場合」と「第三の場合」のいずれにおいても両者は一致していない。この点をどのように考えればよいのであろうか。この点についてすでにみたが、あらためて桜井毅氏の見解を聞くことにしよう。

「従来、市場価値は個別的価値の合計の平均値とみなされるのが通常の理解であったが、それは価値を労働の実体と直結させていることからの帰結であり、価値論の次元での処理であった。しかし市場価値論は、マルクスにあっては、社会的価値の規定の具体的なあり方を説明しているものであって、それは個別的価値を社会的価値として実現していく資本主義的処理方法をあきらかにしているものである。個別的価値と市場価値との総計を比較しあい、その一致によって市場価値が労働の実体をもつ、というような無意味な計算を避け、個

売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である」からである。

城座和夫氏は、「市場価値の平均規定（もちろん価値次元における市場価値の規定であることはいうまでもない）はじつは、市場価値の一般的規定とはなりえず、特殊規定たりうるにとどまるほかないことは明らかであろう」（城座、前掲書、253ページ）といい、「この大量規定こそ市場価値の一般的規定をえるための出発点である」（同書、255ページ）といわれている。

ここにいう「特殊的规定」と「一般的规定」をそれぞれ「理念的規定」と「具体的または現実的规定」と読みかえれば、この点に関するかぎり城座氏の指摘は正しいものと思われる。

別的価値と市場価値それぞれの総計において量的一致がみられないことを承認したとしても、それは社会的に必要な労働量によって価値が規定されている事実に変更を加えるものではないのであって、それこそが、社会的価値の確定のあり方であり、個別的諸価値が社会的価値に整約される機構こそが、固有の市場価値論としてあたえられていた。このことは、いわゆる『虚偽の社会的価値』の問題に、もっとも端的にあらわれている。本来、労働の投下されていない部分としてありながら、『同一種類の諸商品にとっての市場価格の同一性は、資本主義的生産の基礎上で価値の社会的性格がみずからを貫徹する様式である』(Marx, Das Kapital, III, S. 712. 青木文庫(12) 931ページ)とすれば、それは社会的価値とみなざるをえない。²⁴⁾

その桜井氏の主張は、おおむね正鵠を射ているように思われる。市場価値の総計と個別的価値の総計との「量的一致がみられないことを承認したとしても、それは社会的に必要な労働量によって価値が規定されている事実に変更を加えるものではない」という主張は正しいものと思われる。しかし、この前提には、市場価値の総計が個別的価値の総計にまったく一致しているかほぼ一致しているということがあるのである。この点は、看過されるべきではない。市場価値が「労働の実体」をもつかどうかは、「虚偽の社会的価値」にかかわる問題である。なぜかマルクスは市場価値論では「虚偽の社会的価値」に言及していない。それはとも角として、マルクスは、「第二の場合」において下位の条件のもとで生産される支配的大量商品の個別的価値に規制される市場価値を、それが平均価値に近似ではあるが平均価値ではないにもかかわらず、「社会的価値」としてとらえているのである。(第29パラグラフ)したがって、マルクスは、「第二の場合」における大量支配的規定による市場価値が価値の実体を部分的に欠いているとしても、「社会的価値」としてとらえているのである。これは、次のような意味あいをもつものと思われる。すなわち、劣悪な諸条件

24) 桜井毅『生産価格の理論』(東京大学出版会, 1968年) 272ページ。

のもとで生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値が市場価格と一致して、その市場価値どおりに諸商品が売れる場合には、価値の視点からみれば、「社会のうち、自分の労働をこの特定の商品の生産に振り向けることを分業によって引き受ける部分は、自分の欲望をみたく諸物品に表わされた社会的労働によって等価を受けとらなければならない」ということがほぼ貫徹しているのである。したがって、この市場価値も「社会的価値」としてとらえられているものと思われる。他面からみれば、この商品種類に対する社会的欲望(支払能力のある)は、この市場価値が表現する社会的労働時間を必要としているともいえ、この社会的欲望——市場では需要——を代表する市場価格が、劣悪な条件のもとで生産される大量商品の個別的価値で規制される市場価値に一致することによりこれを「社会的価値」とならしめたものとも言えよう。

市場価値に関する大量支配的規定に対して本間要一郎氏はすでにみておいたように批判されている。「上位であれ、下位であれ、それらの商品群がその部門の供給量の大半を占めるときには、この大量を占める商品群の個別的価値に市場価値は一致する、と主張するのが、本来の『支配的大量』説であろう……。このような単純な『支配的大量』説は、たとえば上・中・下位の三つのグループのいずれも市場の大半を占めることができないような『組合せ』のばあいには、市場価値はといったどのグループの個別的価値で決まるのかという、ただちに生ずる疑問に直面しただけで窮地に立つことになり、云々」と。

この本間氏の批判は、生産諸条件の組合わせにかかわる問題でもある。マルクスは、「中位の構成をもつ資本……以外のすべての資本は、構成がどうであろうと、競争の圧力のもとで、これらの資本と平均化されようとする傾向がある。」(第3パラグラフ)と述べていることからして、本来の製造工業部門では、「第一の場合」のような生産条件を考えていたものと思われる。第40章「差額地代、第二形態」になると次のように述べている。

「本来の製造業では、やがて、どの事業部門にとっても、事業規模の固有の最小限度が形成され、またそれに照応して資本の最低限度が形成されて、それ

以下では個々の事業を成功的に経営することができなくなる。それと同様に、どの事業部門でも、この最低限度を越える資本の標準的的平均的な大きさが形成されて、生産者の大多数は、これだけの大きさの資本を自由に処分することができなければならず、また実際に処分してもいる。』(KⅢ, S. 689)

マルクスは、歴史的にも理論的にも、本来の製造業部門では、「第一の場合」のような生産諸条件の「組合せ」を考えていたように思われる。これに反し、本来の農業部門（「本来の農業」とは耕種農業のこと）では、「第二の場合」におけるような生産諸条件の「組合せ」を考えられていたようだ。上の文章にすぐつけて次のように書かれてある。すなわち、「資本主義的生産様式はただ緩慢に不均等に農業をとらえて行くだけであって、それは農業における資本主義的生産様式の古典国であるイギリスで見られるところである。……劣等地で仕事する生産者たち、つまり平均的な生産条件よりも不利な条件で仕事をする生産者たちが市場価格を決定する。農業で充用される、またおよそ農業のために役立つ資本総量のうちの、大きな一部分は、このような生産者たちの手にあるのである。』(KⅢ, S. 689)

このように、本来の農業部門では「第二の場合」のような生産諸条件の「組合せ」が典型的に現れるものと思われる。問題の第10章には、次のような叙述がある。「あれこれの生産部門では、」需要が増すと、「要求される生産物の一部分はこのようなときにはより劣悪な条件のもとで生産されなければならないから」「市場価値そのものが長短の期間にわたって上がるということにもなりうる。』(第45パラグラフ)。さらに需要が増えると、本来の製造工業部門でも、「第二の場合」のような「組合せ」できあがるものと思われる。

ともあれ、マルクスは、上・中・下位のそれぞれの生産条件のいずれかが「支配的大量」であるものと考えていたように思われる。したがって、上・中・下位の生産条件の「組合せ」の三つの「場合」を想定したものと思われる。それゆえに、本間氏の言われるような、「上・中・下位の三つのグループのいずれも市場の大半を占めることができないような『組合せ』」は、現実的に考

えられないのである。だから、この観点からする大量支配的規定に対する批判はあたらないのである。

一步ゆずって、「上・中・下位の三つのグループのいずれもが市場の大半を占めることができないような『組合せ』」を想定してみよう。この場合に、市場価値を規定するものは、たしかに支配的大量商品ではない。平均価値でもない。このような「組合せ」の場合には、上・中・下位の諸条件のもとで生産される商品量のそれぞれの個別的価値のいずれもが市場価値となりうる資格をもち、そのいずれが市場価値となりうるかは、そのときの需要の状態に依存するといえよう。この点は節をあらためて考察しよう。 (未完)